第3回九鬼周造記念講演会
シンポジウム「J哲学の最前線」
二〇二二年二月一九日
於・Zoomによるオンライン開催

○司会　本日は、みなさんご存じの哲学者二人に、お越しいただいております。

特別な会が組めてうれしく思っております。そして参加くださっているみなさんも、有名な先生方のお話が聴きたくてたまらない、あるいは何か質問したくてたまらないというところだろうかと思います。限られた時間のなかですが、充実したひとときになればと願っています。

質疑応答の時間を後に設けておりますので、ご質問をいただくことができますが、恐縮ですが、おそらくたくさんの質問があるかと思われますので、なるべく質問の際は手短にお願いできましたら幸いです。

この九鬼周造記念講演会ですが、甲南大学には「九鬼周造文庫」があります。本年度は特にその文庫の保管資料において新たに、今まで確認されていなかった書簡の発見がありました。九鬼の書いた書簡草稿、あるいは九鬼宛てに送られてきた書簡といったものです。詳しくは二〇二一年一一月一三日付の朝日新聞掲載記事をご参照ください。またほかに、九鬼周造文庫では九鬼の蔵書なども保管されていまして、蔵書のなかにも九鬼自身の書き込みがあったりするものと考えられますが、このあたりはまだ調査が進んでいないところです。そうした貴重な資料を甲南大学が長らく管理してきているというご縁がありまして、こうした講演会を年に一度開催しております。

ただしこの年次講演会は、狭い意味での九鬼についての研究にテーマを限定しているわけではなく、そういう趣旨のものではございません。九鬼自身が、非常に幅広い関心と知識教養を持った人でしたから、それに合うように、西洋哲学、西洋文化、日本哲学、日本文化、ファッション、また植物学も含めまして、それらに関連する有意義なご講演を、各年度開催してゆくという趣旨でおこなっているものであります。

ですので、本年度も山口先生には、必ずしも九鬼哲学についてのご講演でなくてもよいですよとお願いしたのでした。そのお願いの結果がどうなったかは、どうも、このご講演のなかで語られそうですので、そのことは、また山口先生のご講演に譲ろうと存じます。

みなさまご存じのように、山口先生はたくさんの本を出されています。去年の七月には『日本哲学の最前線』という、

形式において非常に斬新な、また内容において相変わらずきわめて緻密な書物を、出版されました。今日は、この新著『日本哲学の最前線』に関連しての会という趣旨に事実上なっているところがあるかと思います。

そして、この『日本哲学の最前線』という本では、二〇一〇年代に日本語で著作を出している他の日本の思想家たちといいますか、その方々について、山口先生が論じられているわけですが、今日はその論のエッセンス、およびそこに補足する内容、さらには、その次へ今向かって仕事をされている山口先生の現在の新たなお仕事とか、そういうあたりのことが、おうかがいできるのではないかと思っています。

山口先生が論じられている六名の人物のなかの一名である、千葉雅也先生が、本日、直接お越しくださっていまして、大変貴重な機会です。どのような話題になるのでしょうか。山口さんよく解釈してくれた、というようなことなのか。いや、自分はそんなことは言っていないので、山口さんの言っていることはちがう、ということだとか、あるいはほかのことですとか。どのようなお話が聞けるのか、私も、みなさんと共に本日の聴き手の一人として、楽しみにしている次第です。

ご挨拶はこのぐらいにいたしまして、まずは、山口先生から五〇分ほどのご講演をいただきます。その後、千葉先生からの山口先生へのご質問をいただき、また山口先生から千葉先生のご質問への応答の時間をしばらくの間とりまして、最後、参加者のみなさまをまじえての質疑応答の時間にするという展開で、二時間ほど進めてまいろうと存じます。本日司会の私は川口茂雄と申します。よろしくお願いいたします。

それでは山口先生、ご講演をいただけますでしょうか。ＰＤＦの講演ファイルはＺＯＯＭのチャットでもみなさまに配付しておりますが、あわせて画面共有もいただくかたちです。それでは山口先生、どうぞ、よろしくお願いいたします。

【山口先生の講演は一〇〇～一一四ページに掲載】

○司会　山口先生、ご講演を、大変ありがとうございました。

山口先生のご著書での著述をご存じのみなさんにはもともとなじみのあることだと思いますが、一行一行、一語一語、本当に揺るがせにできない書き方をされて、また同時に、他の方の書かれた言葉を揺るがせにせずに読むという、山口先生のすごさを改めて体験させていただいた印象でした。

これまでに山口先生のご著書に触れたことはあるけれども、実際お話しされるのは、今日初めて見て聞いたという方は、たぶん、この臨場感がある実際の講演で、語られる言葉が、書物で読むのとはまた全然違う雰囲気を持つ面があるのと同時に、しかし書かれていることが、やっぱり本当にこういう

方がこういう言葉、こういうつもりで書いておられるんだなと具体的に体感されて、感慨深かったのではないかなと思います。

しかし、それはいったん置いておくとしまして。さて、いま山口先生のご講演に私たちは出会い、出くわしました。そして、このご講演に、どう反応するか。このこともまた今日の会では求められているわけです。それはなかなか大変なことです。これだけの密度ある講演ですので……大変です。

そこで、スペシャルなゲストに本日はお越しいただいていますので、千葉先生に、みなさんの先陣をお願いしまして、山口先生への問いかけを、投げかけていただけましたらと、存じます。

それでは、千葉先生、どうぞよろしくお願いいたします。

千葉雅也先生によるコメント

○千葉　山口さん、どうもありがとうございました。

みなさん、今日はどうも土曜日に集まってくださって、ありがとうございます。千葉雅也です。よろしくお願いします。

山口さんのご講演を受けたコメントをして、そこから山口さんとのやり取りに入ろうと思います。

山口さんの本『日本哲学の最前線』は、もちろん僕も読ませていただいて、自分があんなふうに大きく取り上げられるのは、しかもああいう形で自分の仕事を総合的にまとめていただいたのは初めてなので、大変うれしかったです。小説まで含めて、自分自身の仕事の一貫性をまとめてもらうと、仕事の全体がこういうふうに見えてくるんだなとひとつの客観視ができて、とてもありがたく思います。

國分さんとは、僕はよくしゃべるんですけれども、國分さんも『日本哲学の最前線』のことを、「なにか照れくさいよね」と言っていました。たぶん、取り上げられた人たちは、みんな喜んでいるんじゃないかと思いますね。

〈J哲学〉という前提があって、そういう取り上げ方がなされているわけです。僕などは〈日本現代思想〉と言ったりするんですけれども。

世界的に、とくに英語圏では、いわゆる分析系の哲学のアプローチがすごく強まっている。特に、PilPapersといった論文データベースで、そこに上がってくる新しい研究にさらに論文をかぶせていくような研究スタイルですね。英語圏のなかで話題になっているトピックのスレッドにどんどんレスをつけていくスタイルが、ひとつ大きな形になっている。でも、そうじゃない大陸系哲学のアプローチ、フランス現代思想などもあるし、それから哲学史研究という分野も相変わらずあるわけです。

日本には独特の、現代の分析哲学でも大陸哲学でもないよ

うなアプローチがあって、そこを何らかのかたちで集合的に捉えたほうがいいのではないかと、僕も以前から思っていました。イタリア現代思想は、フランス現代思想に続いて読まれるようになり、イタリアンセオリーとも呼ばれています。アガンベンを中心として、エスポジトやカッチャーリなどですね。

しかし、日本語で書かれたものは、言語の壁があって、なかなかグローバルに議論の対象になるのが難しい。今後、どういう形で世界へと議論を接続するか、課題だなと思います。

だいぶ以前に、日本の現代思想についての論集を海外の出版社から出そうということで、スペインの大学の先生から連絡をいただいたことがありました。残念ながらその企画は頓挫したのですが、そのスペインの方は、『現代思想』に僕が書いたものを読んでいると言うんです。青土社の『現代思想』です。スペインにいる人が日本語の『現代思想』を読んでいることに、ちょっとびっくりしました。

ですから、僕は英語に翻訳して自分の仕事を出すことはあまりしていないですが、それでも、海外で、日本語で日本の現代思想に興味を持ってくれている人は、いるにはいるということです。

そこからつないでいくと、今回は九鬼周造を記念する講演会ですが、九鬼という人も、ヨーロッパと日本、関東と関西とか、まさに二つのものの間で考えた人です。彼の言葉で言えば、「二元の邂逅」ですね。

九鬼はフランスなどヨーロッパを遊学して、日本に戻ってきてから『「いき」の構造』を出しました。

海外留学をすると、その後、ヨーロッパかぶれになったりとか、あるいはアメリカに行ってアメリカ的な民主制や合理性にすっかりかぶれて、〝日本は遅れているから……〟みたいな考え方に向かう人もしばしばいます。

ですが、僕が思うに、もっと複雑な心境になるものだと思います。それはたとえば、夏目漱石もそうだったと思いますが、西洋に行くことで、〈日本で考え、日本語で書く〉とはどういうことかを、海外経験をする前よりも一段、二段、深まったところで、ネガティヴな言い方をするとコンプレックスがいっそう深まったようなところで、考えるようになると思うんです。

「いき」という概念を九鬼は、例えば「シック」といった西洋の概念には翻訳できない独特のものだと言っています。これは日本特殊論の一種ではあるけれども、奇妙なことに、そのローカルなことを、〝これはローカルなんだ〟という意識のもとで考えることで、その向こうに、なにか普遍的な人間と人間の偶然性に基づく関係を九鬼は見出していく。特殊から普遍へと、まったく逆転したものがつながる。まさに、

特殊と普遍という二元の偶然的邂逅のようなことを、「いき」の分析を通じて引き起こすわけなんです。

まさに、ローカルなものと普遍、特殊と普遍の出会いが、九鬼のヨーロッパ体験からの帰結なのではないかと思います。

自分に引きつけると、僕も〈偶然性〉を自分のテーマにしています。山口さんが取り上げてくださったように、〈非意味的切断〉は僕のドゥルーズ読解でクローズアップしたキーワードですが、あのドゥルーズ論のときにはまだ、そこまで〈偶然性〉というキーワードがメインではなかったと思います。どちらかというと、〝ありとあらゆることが関係している、そのように世界を捉えることが善である〟という、大きな一九六〇年代以後の前提というか、そういうものに対して、部分的であれ、物事が切り離されて無関係にあることをむしろ肯定する、というのがテーマでした。

「無関係」と言うと、何か冷たいことを言ってるようだけれど、でも、すべてがべったりと関係し続けている状況は、非常に息苦しい帰結も生むわけですね。そのことを、特に今のSNSの時代にわれわれは実感している。かつて一九八〇年代に、〝どんどんいろんな物事がつながって、ミックスされれば、おもしろいことが起きるよ〟と楽観的に考えていたのとは変わってしまったわけです。

そういうなかで、むしろ「無関係」のポジティブな意味を言うということだったわけです。ところで無関係とはどういうことかというと、それは〝物事がつながり合って互いを条件づけ合う必然性〟からの離脱なので、これは〈偶然性〉の導入になるわけですね。だから、そこから、カンタン・メイヤスーの根源的な〈偶然性〉の哲学に向かっていくことになった。メイヤスーの紹介をその後、本格的にやることになるわけです。

というわけで、かつて僕もフランスに留学して、何か複雑な思いを持ったのです。フランス万歳なんて全然思わないし、逆に日本万歳とも思わないけれど、でも、自分はやはり日本語の思考に軸足があるだろうなと思いながら帰ってきたところがある。

ところが昨今、大学等で求められるのは、がんがん英語の有名ジャーナルに論文を書くことだったりするわけです。しかしそれよりも、日本語で、日本語の固有性においてなにが考えられるかという課題のほうが、自分にとっては大きいのです。

たとえばデリダは、フランス語で、フランス語の固有の語法、フランス語らしいさまざまな表現を駆使して、哲学を作ったわけです。それを世界中で必死に翻訳している。ものすごい高度な言葉遊びの大迷宮を翻訳しているわけです。なのに、日本語で哲学をやっても、みんながんばって翻訳して

くれないって、おかしいじゃないですかとちょっと思うわけです。

それは、やっぱりヨーロッパは世界の覇者だからなのです。

今、僕は小説を書いています。小説を書くことにおいては、まさに日本語という言語をどこまで展開できるかが直接に問われる。小説という、僕のもう一つの仕事のセリーには、日本語の可能性に正面から取り組むという意識があります。

ちょうど僕がヨーロッパから帰ってきた時期にしたことで、九鬼が『「いき」の構造』を帰国後に書いた展開と似ているかもしれないのは、いわゆるギャル男のファッションについて書いたことです。

これは、ヨーロッパから帰ってきた後に、日本のストリートカルチャーの非常に独特の生成変化的問題を捉えるために書いた、ということになると思うんです。だから、僕にとっては、あの〈ギャル男論〉は『「いき」の構造』に似ているところがあり、しかも「性」という共通のテーマがある。自分のアイデンティティを維持するのではなく、ジェンダーを曖昧にし、社会的なヒエラルキーも曖昧にし、乱交的な関係のなかで自分自身を揺さぶっていく快楽について考えたわけです。

刹那的で、行き当たりばったりな、チャラい生き方。そのチャラさを、非常に真剣に捉え直すことだった。

それは、まさに「偶然」における実存を論じたものだと言えます。

ここまでが、前置きになります。半分は、偶然の赴くままにしゃべっているんですけれども。

さて、山口さんが今回取り上げてくださった、宮野さんのお仕事について。宮野さんの病のこととの関わりで、あるいは、彼女の仕事全体で問われているところの、コントロールするという意志を強く持つのではなく、偶然的に出会う、という主題について。山口さんはご著書『日本哲学の最前線』のなかで扱われた何人かの哲学者に、宮野さんについての論を追加して、それらの総体を〈コントロール批判〉として捉える。これが、J哲学に見られる基本的な方向性だ、とされたわけですね。

確かにそうなんです。〈コントロール批判〉なんです。僕も、ここのところコロナの状況になってからも、一定の感染防止は必要だけれども、その対応が、自粛警察とか、マスク警察とか、あまりにファシズム的になってしまうときがあって、そういうものに違和感を持ってきました。

〈コントロール批判〉とか、出会いを大事にするために勇気を持つ、覚悟をもつということを哲学者は言いますが、すると世間的には、そう言われると何か〝エモい〟ねというか、〝気持ち的には分かる〟というか、人間が生きることにおい

て、〝そういうのは大事だよね〟ぐらいの程度には、同意してくれる。

けれども、いざ、社会運営の現場、組織運営の現場になると、そうはいかない。〈脱コントロール〉ということを現実にちゃんと考慮できるかというと、公的な言葉としては、そういうことって言えないんです。

たとえば、組織的な仕事では、必ず進捗をチェックし、それで報告書を書いて、みたいなことで、コントロールしていくことになるわけです。好きに任せておけば、おもしろいことができるかもしれません……なんてことには、普通ならないわけです。

偶然の出会い、そのリスクを引き受ける話って、哲学的には言えるにしても、社会が大規模にコントロール的で、合理主義的、契約主義的な方向に変わっていくことに対してどう抵抗するかということまでは、普通は言わない人が多いようです。

それは「ずるいな」と僕は思っているんです。僕なんかはある程度それを言っていて、それで嫌われることがあるし、それは引き受けているんですけれども。みんな、それを言わないで、言わないけれども一応、世の中に対しては疑問を持っていて、でもその疑問は哲学的表現で暗号化して、実際にどうなのかまでは言わないようにして……というわけです。

〈脱コントロール〉のテーマは非常に重要です。それは理論的にも重要、個人の実存としても重要、のみならず、社会をどうしていくかというマクロな規模でも重要です。だけれども、そこがなかなか難しいです。社会的に、こういう議論にどういう具体性を持たせるかのバランスが、難しいと思います。

次に、もう一つ、大きな枠組みでの事柄をつけ加えようと思います。〈脱コントロール〉というのは、こう言うと乱暴かもしれないですが、西洋の合理主義に対する批判ということだと思います。それは日本の哲学だからというか、日本哲学って、そこにどうしてもこだわるんだろうなと思います。

つまり、極端に言うと科学主義に極まっていくような合理主義が西洋で非常に強くあることに対して、偶然に任せるとか、仏教的な無とかそういうものにつながっていくようなものが大事だという直感が少なくともローカルにあって、それと現代的な知性にどう折り合いをつけていくか。

ヨーロッパにおいても、意識的なコントロールの背後には、無意識的で、非合理的なものが動いているんだという考えがあった。フロイト、ニーチェですね。

ところが、無意識についてのフロイトからラカンへの展開を見ると、どうか。そういった無意識の次元には、ある種の中心があって、ひとつのブラックホールというか、穴みたい

なものがあり、無意識は意識からは捉えられないけど、その裏の次元が、何か巨大な穴の周りをぐるぐる回っている。裏の世界の〝中心〟がある、裏の〝秩序〟がある、というロジックになっていく。

このことが、いわゆる浅田彰・東浩紀ラインで言われるところの〝否定神学〟的構造というものです。つまり、表においては意識的な合理主義があり、その裏面に無意識、非合理性があるんだけれど、その無意識と非合理性にすら〝中心〟があると設定してしまうのが、西洋の現代思想の展開だった。

東浩紀が一九九八年に『存在論的、郵便的』で、はっきり否定神学批判というテーマを出して、無意識が穴の周りをめぐっているという構造をいかに乗り越えるかという話になった。それは、よりラディカルな意味での偶然性にさらされた無意識、偶然的無意識に翻弄されるものとしての人間をどう捉え直すか、ということだと言えるように思います。

そういう意味で、日本現代思想における〈コントロール批判〉は、二重の意味で、西洋に対して距離を取ろうとしているところがある。ひとつは合理主義に対して、もう一つは合理主義化された無意識の議論に対して、という両面です。その両面を客観視したうえで、偶然性とともにある実存とは何かを考え直す方向に日本の現代思想は向かったと。

ただ、先ほども言ったように、こうしたことが社会的イシューとの関係でどうなるかというと難しいところだなと思います。

以上が僕のコメントです。

○司会　山口先生、これは何か大変に重量級の問いかけが出てきましたが、ひとまず、どうしましょうか。

○山口　対談に入ればいいと思います。普通にしゃべっていくのがいいのではないかなと。

○司会　わかりました。

では、山口先生、よろしくお願いいたします。

ディスカッション

○山口　まず、いま千葉さんがおっしゃられた、思想的な問いを一般社会のところにどうつなげるか、これは大きい問題です。〝嫌われる〟ということが起こること。こうした現実作用が非常に重要で、哲学の議論、抽象的な次元、そういう次元で言えることが個別具体のところにつなげられたときに、発言した人が引き受けねばならないものがいろいろ出てきてしまう。そういうときに起こるひとつが、〝嫌われる〟ということです。

僕も〝嫌われる〟のを避けていると、そういう面があるような気がするから、ちょっと考えさせられます。〝嫌われる〟ことだけでなくて、それ以外にもいろいろあるんでしょうけ

ど、そうしたいろいろなことを、ある程度引き受けることを考えながらやらなければならないのかな、という気はしますね。

○千葉　僕も引き受けみたいなことを言うときはあるけど、それはやっぱりバランスですよね。

○山口　たしかに、ある種政治的なところがありますね。だから、公知のルールがないようなところで、そのつど、様子を見つつやっていくことが必要となってきます。ちょっとそれも考えさせられました。

たくさんの話の材料をコメントでいただきましたので、以下ひとつずつ答えます。

普遍性についての話がありました、特殊・普遍の邂逅。確かにあれも大事だなと。

たとえば、いわゆる英語圏の哲学には、やはり普遍志向が強いところがある。何かしら議論があって、それを先行研究を調べて、先行研究に何かつけ足していく、というのを繰り返す。〝これが非常にスタンダードなやり方だ〟というスタンスで英語圏哲学研究は営まれていますが、やっぱり普遍化は難しいと言えます。たぶん、スタンダードということが難しい。ひとつのスタンダードを選んだときに、ひとつ選んじゃうとそれも〝特殊〟になりますよね。そして〝特殊〟になるっていうのは、必ずそこから排除されているものがあるということです。排除されるものがあるとなると、〝これ、スタンダードだぞ〟と言ったところで、それは普遍という難しい問題を実は避けたものになっていて、そういう難点を十分考えられていないと言えます。

われわれが分析哲学のアプローチでやることは、どうしても特殊性を帯びている。そうなると、スタンダードを追求すること自体はいいのですが、本当にそこばっかりしか見ていないようになると、よそが見えなくなってきて、別の狭さにつながってきます。

じゃあ、どうするか。千葉さんは夏目漱石にも言及されていました。僕も好きで読むんですが、夏目漱石が自然主義を批判するときに、個別の問題じゃなくて、そもそも何々主義というひとつのものにべったりなることを批判していたわけです。自然主義というやり方は結構だけれども、それ一個だけで行こうとすると、やっぱり人間ってそういうものではなくて、足りなくなってしまう。どちらかと言うともっと内発的に、外から型をかぶせるのではなくて、内発的に出てくるものの方向を大事にするべきでは……みたいな感じで。

当然ながら、内発的になったら普遍的になる、というわけでもないですが。それでも、少なくとも、外から型をかぶせるのではないような仕方になるでしょう。

日本の哲学についても、二〇一〇年代の日本の哲学を調べ

て今回本にしてみたわけですが、やっぱり〈特殊〉なんです。〈特殊〉であって、やはり文脈に乗っていて、日本の状況のなかから出てきたところがある。だがそういう意味ではそこに〈必然性〉みたいなものもあって。こうしたところを、やっぱり九鬼も考えようとしていたかもしれないです。私もその辺りをつかみたい、というふうに思いますね。

○千葉　そうですね。

○山口　六人の考えを本でまとめたうえに、さらに今日、新しい七人目に宮野さんが出てきました。そして宮野さんの〈コントロール批判〉と〈偶然〉の出会いを考えるのが今日のモチーフでした。やっぱりコントロールというものには、過剰になりがちなところがある気がするんです。コントロールって、エスカレートするというか。どうしても、いったんコントロールしようとし始めると、何かコントロールできてない事柄が気になりだす。そういうのが続いていくと、ファシズム的状態というか、全体をもれなくコントロールするようになる。〈コントロール批判〉は常に必要なものであって、気にすべきはこの過剰なる傾向です。なぜ、コントロールがどんどん過剰になっていくのか、このことはさらに気になりますね。

○千葉　なるほど。

○山口　あと、話がいろいろな点に散らばって申し訳ないですが、最後におっしゃった、否定神学的という話も重要だと思います。

　さっきの普遍性の話にも関わりますが、こういう感じですよね。西洋は理性とか立てようとしているけれども、〈ザ・理性〉とかを立てるとそこから排除されるものが出てくる。〝これが理性だ〟と言うときに、ないものにされてしまう事柄。西洋文化はそれを気にして、排除してしまったものを取りもどそうとするんだけれど、このないもののほうを、〈ザ・ない〉というか、何と言うか、原理にしてしまう。

○千葉　ないもののほうも、大文字にしてしまう。

○山口　だから、〈ザ・理性〉の外側を考えると、〈無〉を大文字化しないことが大事だと気づかれる。

　この点をもう一歩、立ち止まってしまわずに先へ行くとなると、無にもいろいろあるのでは、と考えることになるんですね。

○千葉　そうだと思います。

○山口　これは、非常に大事なモチーフというか。要するに、もう一周回さねばならんところですよね。

○千葉　『現代思想』の九鬼周造特集増刊号のときに、僕はそういうことを書きました。

　九鬼は、偶然性という〈無〉を、そのつどの出会いごとにミクロに考えていて。ないということを集約するような、巨

大な無を立ててはいないんだ、と。「原始偶然」という概念はあるけれども、ただそれはひとつの理念であって、それが常に同一的に働いているようなイメージではないのではないか、と。そこが重要で、たぶん、普遍性を目指す方向で、特定の主義を一貫させようとしない。あるいは、それを一貫させることに根本的な違和感を持つような心性と九鬼はつながっているんだと思うんです。

あまり分析哲学のこと言うのもあれなんだけれども、やっぱり分析哲学って、要するに〝何々主義をいかに擁護するか〟のゲームみたいになっているじゃないですか。

○山口　ええ。

○千葉　申し訳ないけれども、あのゲーム性は子供っぽくて耐えられないんです。

○山口　なるほど。

○千葉　だって〝何々主義を擁護する〟って、大人じゃないですよね。実際分析哲学の業界の人たちも、そのことを批判する人もいる。最近の分析哲学は青年のスポーツになっている、というように。

○山口　思うに、哲学においては老成が重要です。ところが分析哲学には、成熟、老成のベクトルがあまりないんです。そこはあまり気にしてなくて、若者的にやることに専心するというか。

要するに、成熟した人も、まだ全然分析哲学を初めて数か月の人も、まったく同じ土俵でできるように制度化されている。その結果ああいう論証のスタイルで〝主義〟をサポートするというスタイルになっていった。ここで見逃されているのは、経験とか年を経るごとによって、知のあり方が深まってくるというベクトルです。

○千葉　それは〈時間〉の問題ですよね。

○山口　そうです。分析哲学の論証は、ある種、無時間的であって、法則的であって、そっち側を分析哲学は捉えようとする。

○千葉　空間的なんだと思うんですが。

○山口　そうも言えるかもしれない。

○千葉　案外これは本質的なことを捉えていて、やっぱり大陸哲学のほうは、常に時間性とか歴史性を問題にしてきたわけですよね。

○山口　ええ。

○千葉　それから、もちろんフーコーが言うように、近代の、デカルトだけじゃないけど、それぐらいの時期から、身体的次元抜きで、頭で考えれば全て解決するみたいな、知のあり方に変わっていったけど、それ以前には、もっとトータルな意味での、魂をどういうふうに修練していくかという生成変化の問題があった。ものを考えるのは自分が変わっていくこ

となんだというのが、古代にはあった。けれども近代になってから、自分が変わらないでも、〝ただ頭さえよければいい〟みたいなことになってしまったことを、フーコーは『主体の解釈学』で言っている。僕はそのあたりの話をよく参照するんです。

ヨーロッパやアジア、特に儒家の思想にも成長の問題はある。

○山口　うん。

○千葉　日本にもあるわけですよね。

○山口　ええ。

分析哲学はどのようになっているかというと、広く言うと、論証というものがあって、論証でもって〝主義〟をサポートする、というスタイルの広がりやすさが特徴というか。それには、老成、成熟を前提にしない、スポーツ的なところがある。この意味で多くの人に広がりやすい。他方で、やはりそういうスタイルでは見えてこない次元もあって、こちらも大事にしたい。

結局、分析哲学者のなかで僕が非常に好むのは、やはり、ちょっと分析系の標準的なスタイルから外れちゃってる人になるんですね。だから、たとえばトマス・ネーゲルとか、あるいはローティとかも結構好きです。とはいえなかなかローティぐらいになると、彼を分析哲学だと言う人はいなくなってくる。

○千葉　ローティは分析系じゃないですよね。

○山口　ないですよね。だから、分析哲学にも内部批判はあるけれども、そちらへ進むと、分析哲学から外れてしまうことになるのかな。すなわちそうした批判自体は、分析哲学のなかに収まらなくなってしまう。

でも、そうか、これは真理の話とかかわりますね。真理って二種類ありますよね。さっき千葉さんがおっしゃられたような、客観化された真理というか、誰であってもアクセスできて、計算できたりするようなタイプの真理と、もうひとつの、自分が変わることによって体得できるようなタイプの真理。古くは西洋にも後者の意味の真理って、相応に尊重されているところがあったでしょうけれども、どんどん近世・近代を経て、後者のウエイトが減っていって。

○千葉　そうだと思います。ある種、そういうことを言うと、〝保守〟と言われるわけです。そういう真理が大事だと言うとね。

○山口　真理が民主化されていく、という。

○千葉　まあそういうことですよね。

しかし〈真理はどういうふうに捉えられるべきか〉という事柄は、全然自明じゃないし、一枚岩ではない。

○山口　だから、西洋の真理概念も一定の方向というか、これ

はまた特殊と普遍の問題ですよね。〈ザ・真理〉みたいな感じで、常に流れに幅をきかせているけれども、それは歴史と文脈を背景にしていて。各時代に、真理のほかのあり方は、抑圧されているんでしょうね。ある一つの真理のあり方ばっかり信奉する人が多いときには、別のあり方は抑圧されている、ということかなと。

○千葉　そうですよね。無時間的ではないタイプの真理は、ヨーロッパでは、フーコーとかドゥルーズはそういうことを考えていたと思う。日本での〈偶然性〉を重視する議論は、またちょっと独特の仕方で、必ずしも近代的ではない真理のあり方を、模索しているのかもしれないですよね。

たとえば季節の真理に気づくような、和歌とか日本の伝統的な文学で重要視されている感覚ってあるわけですよね。ああ、春になったとか、それが恋愛と結びついたりもするわけで。九鬼が見ていたような二元の出会いは、ひとつの真理論でもあって、そこで偶然的にパッときらめく真理が問われている。それは古代ギリシアにおけるピュシスの現われとも近く、ハイデガー的な方向で解釈できるかもしれませんが、でもやっぱりギリシアは西洋で、日本で言われる〈偶然性〉の、もっと脆い感じとはまた違うと思うんですよ。ギリシアはもっと堅固な感じがする。

もうひとつの別のアレーテイアみたいなのものが日本の文脈のなかにあるのかもしれない。だから九鬼は、フランスの最先端も見てきたけれど、何か違う、と。何か違うから、やっぱり「いき」なんだと言おうとしたときに、九鬼は別のアレーテイアを見ようとしていたのかなという気がするんです。

○山口　確かに。和歌も論じますよね、九鬼は。

○千葉　駄洒落とかも。

○山口　おもしろいですよね。だから、歌もひとつの真理を捉えられる。いわばひとつの形態として。実際、僕はすごく詳しいわけじゃないですが、千葉さんがおっしゃったように、日本の歌は、人間の恋を、季節だったり、自然だったりというところに重ねたりする。すなわち、直接恋愛で語るのではなくて、自然なり季節なりを重ねて、間接的にそれを通して語る。そういうやり方で、何かそこにはアレーテイアで真理を開示をするような、独特のあり方があったのかもなというのはありますよね。

○千葉　なるほど。人間が中心じゃないですよね。

○山口　そうですね。

○千葉　自然があって、そこに人間も一部にあって。要するに、ほとんど出来事なんですよね。ドゥルーズっぽいとも言える。

○山口　なるほど。

○千葉　すべて出来事という感じですよね。

○山口　そうですよね。言うならば、出来事として、事柄は捉

えられていくという方向。

○千葉　そうですね。恋愛も出来事ですから。

○山口　まあそうなりますね。

○千葉　それは、花が咲いたり、散ったりするのと同じなので。

○山口　だから、近代西洋というのが主体とか理性とか、そういうものと連関で真理をどんどん捉えるようになってきたのだとしたら、それとはちょっと別のなにかを見つけるのに、和歌は参照できるというか、さかのぼる価値が非常にあるような話題、題材だなというふうに思いますよね。

○千葉　そういうことが現代の日本の思想にもずっとあるんだろうなというのは、僕も思うところなんですよね。非常に薄い世界像というか、非常にはかない世界像。ヨーロッパに僕が行っていたときに、これが何か伝わらないと感じた。こういう微妙なところをどう言語化するかというモチベーションがあります。

○山口　でも、真理を……って、やっぱり語り方がすごい重要事項になってくる。要するに、どういう言語表現というか、どういう表現を使うかで。私自身のことを語ると、大体、二〇一四年ぐらいかな、とりあえず二一世紀に入ってから相当の期間、とにかく論文ばかり書いてたんです。まさに分析哲学的な論文をいくつも書いていたんですが、どうも、ちょっと自分で物足りないというふうになってきて。それは、表現的なレベルで物足りなくなってきたんです。

たとえば、分析哲学で行なわれるのは、具体例とかを出すときに、Aさんがこうこうで、Bさんがこうリアクションして、ということを思考実験的に書いたりするのですが、これが、どうも空回っているような感じがしてきたんです。あるときから、僕自身は、もっと生きた例というか、現実にある例を使い出して、議論を現実に接地させるようになりました。

そういうのやり始めると、だんだん分析哲学のやり方も、相対化されていきます。ああいうやり方も一個のものなんだな、と。あれはあれで一個の型として、一回ぐらいは学んでおくのはいいかなと思うんですけれども、その後ひとつの型にとらわれてしまうと、それは逆にちょっと縛りになってくる。だから型に入った後、何をするかが重要になる。そこからいかに自分をずらしていくか、破っていくかが大事になってきます。

千葉さんの場合は、哲学の型にとらわれず小説を書きますよね。言及させていただきました、『デッドライン』。

○千葉　はい、ありがとうございます。

○山口　やはり千葉さんの哲学の仕事を読むと、この作品にもいろいろつながりますね。

○千葉　そうですね。つながっていると思います。

○山口　『デッドライン』はおもしろかった。大学院の修士課

程というあの時期が言語化されるのは、おもしろい。あの時期を、僕も修士論文を書いて越えてきたんで。

○千葉　修士のときは大変ですから。

○山口　大変ですよね。研究室でてんやわんやというか。期限ぎりぎりまで書くということが起こりうるような。

○千葉　そうそう、そういうものですよね。あの当時、修士を三年やる人は多かったですね、僕の周りでは。

○山口　たぶん、理由はいろいろあって、修士論文という比較的長い分量を書く。長くなるとまとめるのが困難になってくる。そういうとき、これほどの長さの執筆には人生で初めてチャレンジするので、どうしても計画は予定どおり進まずとか、そういうこともあって。

やっぱり小説として言語化されているのを読むことによって、もう一度、自分自身の過去の体験も見直されて、意味づけもされ直すというのがよいですね。私は、小説と真理というか、現実の真のあり方の開示は、何かしら重要な関係を持っているところがあると考えています。

千葉さんは、小説を書くことを実践としてされているんですが、千葉さんにとってそこはどうなっているのかなというのは気になりますね。ひとことで言えば、小説と真理ということが。

○千葉　小説は現実の偶然の素材を使ったりもするけれども、でもお話を作るときには、ある種の必然化が起こるわけです。やっぱりフィクションはお話を作ることなので。

○山口　おっしゃることは、わかります。だから、写実的なリアリズム小説とかも、リアリズムと言いながら、やっぱり作ってますよね。

○千葉　そうですね。

○山口　なぜかと言うと、リアリズムと言われる小説はたくさんあって、どれも書く作品全然違う世界を描いています。明治だと、心理小説的なリアリズムもあれば……。

○千葉　小説において、真理として提示されるものは、もっとも〝作られたもの〟なんです。でもこれは難しい問題ですね。

○山口　小説はどこか一つのところに収れんしていくわけではまったくなくて、〝リアル〟に書くと言っても、本当にそれぞれ作品によって違った〝リアル〟が描かれる。でも、逆に言えば、それが小説というものに特有の世界の開示の仕方というか。だから、〈多様に開示する〉みたいなのがあるのかなと思ったりはします。

要するに、小説という企て自体が、現実の一つの真理のあり方を明らかにするよりも、むしろ、いろんな仕方、いろんな真理というか、いろんなあり方で描き出すところに存するのかなと。

○司会　このお二人、やはり今のジャパンの代表的な論者お二

人がトークすると、もう止まらないという感じです。拝聴しておりますけれども。ずっと聴いていたいところなのですが、そろそろ、フロアのみなさまもがまんできなくなってきて、ご質問をされたいところだろうと思います。

では、どの話題でも、両先生にでも、まずはどちらかの先生にお聞きしたいことでも、よいと思いますので、ご質問をいただければと思います。

はい、ＴＭさん、よろしくお願いします。

来聴者との質疑応答

○ＴＭ　山口先生にご質問です。

コントロールについて山口先生がお考えになっていることは、こういうことでしょうか。人為的なコントロールに対しては、抵抗する。自然的なコントロールについては、日本の思想で言えば、あらがえない。伝統的には、自然現象には抵抗できないという考え方なのかと思うので。そういう理解でいいでしょうか。

これに対して、西洋の思想には、自然的なものも人為的なものもコントロールしたいという強い要求を感じられる面もある。その場合のコントロールということの理解について、確認させていただければと思います。

○山口　ご質問ありがとうございます。コントロールについて、これは言葉づかいの問題になりますかね。

コントロールというのは、コントロールするという行為だから、基本的に人間がすること。もちろん自然が人間をコントロールしてくる、という言い方は比喩としては可能ですが、自然はただ起こっている。

だから、言葉使いを正確にすれば、自然が何かコントロールするよりも、人間がコントロールできないようなことが、どんどん起きるのが自然だと。そういう言葉使いです。

いずれにせよ、ちょっと対談でも出ましたが、人間の行うコントロールは過剰に行きやすいので、ちょっとそこを批判的に見るのは大事なことかなという感じですね。

○ＴＭ　ありがとうございました。

○司会　ＴＭさん、もうひとこと言われますかね、よろしくお願いいたします。

○ＴＭ　もう一つだけ、山口先生に。

宮野さんについては、私などは、近い世代ですが、京大の人間環境学研究科のほうの大学院生でしたので、宮野さんが所属した文学研究科とは距離を置いたところで見ることができまして、元気なころの宮野さんも知っていますし、病気のときの宮野さんも知っていますし、亡くなった後の評価された宮野さんのことも、私たちは知っていまして。そのなかで、今回、宮野さんの往復書簡を読まれていて、宮野さんの思想

に、何か以前の時期との違いみたいなことが生じているか、あるいは一貫しているか、そうした点を、山口先生はどのように受け取られていますか。

○山口　宮野さんは、堅い論文も書くし、もちろん九鬼に関しても専門的学術書を書いています。他方で今回僕が取り上げた本は、学術的なのとは違ったかたちの語り方のものです。それによってどんな変化があるかはわからないですけれども、たとえば、僕が〈J哲学〉について論じる文脈においては、宮野さんが書いたもののなかでぜひ取り上げたい言説は今回の本になるのです。やっぱりそれは、語り方の違いということになりますよね。もちろんどっちがいいとか、そういうことはなかなか言えないです。学問的な語り方も、それは文脈によっては大事なものだし。

ただし、生きた哲学で、生きた言葉が出てくる形式というのはそれなりに存在して、学術的な語りにおいては、どうもそういうものは出ないようなかたちになっているというのは、あるかなと思います。

僕自身が今回の本を選んだのは理由があることで、こっちこそが〈J哲学〉だなと。そういう自分の判断で、選んでいます。

○TM　ありがとうございました。

○司会　ありがとうございました。

では、NKさんですかね。ご質問よろしくお願いします。

○NK　千葉さんに主に聞いてみたいことになります。

山口さんの発表のなかで、出会いの可能性の条件のお話があって、私なりに要約すると、勇気を持って、危険な可能性に賭けること。そして、かけがえのない偶然性を必然として受け入れること、という二点が出てきました。それは、個人のレベルで主張している、あるいは哲学の内輪のなかで論じられることはあっても、表社会のレベルで論じられることや、表社会のなかでは、その主張をみずから引き受けて発言している人はあまりいない、というお話があったと思うんです。

それについて、千葉さんは、それを引き受けておられる場面があるわけですよね。

○千葉　僕のツイッターを見ていたら、わかると思います。

○NK　その引き受け方のテンションって、こういうものですか、というのを、聞いてみたいというご質問になると思います。

○千葉　なるほど。

○NK　たとえば、哲学の講読の授業とかをしているときに、テクストを解釈しますとなって、そこで、みんながある一つの読み方のほうに偏っていく。そうすると、空くじゃないですか。反対の読み方のポジションが。なので、クラス全体へ貢献する気持ちで、私がその空いている反対の読み方のポジ

ションを引き受けてみる。そういう場面が、自分にはあるんですけれども。

これを拡大したような態度で、ツイートしているようなことをなさっているのでしょうか、というのをお聞きしてみたいです。ちょっと、わかりにくい質問だったですか。

○千葉　いや、わかりますよ。

だけど、ポジションが空いているから、そこに入る、というのとは僕の姿勢は違いますね。だって、それはNKさんだって、単にポジションが空いているからというだけの理由ではないんじゃないですか。

○NK　そうですね、単に空いているということ以上に……。

○千葉　じゃないと、ポジショントークになっちゃうじゃないですか。

○NK　うん、うん。

○千葉　僕の言うことは、よく〝逆張り〟だとか言われるんです。ある種の、世の中をよりよくしていく、というのはつまりコントロール可能性を高めていくことですが、それに対して、「いや、本当にそれだけでいいのか」と言うと、逆張りだって言われるわけです。別に、僕は逆張りしているんじゃなくて、もともとそれに違和感があるから違和感を述べているわけなんです。

だから、NKさんのおっしゃることはわかるんだけれども、そっち側が空いているからそこを言う、というよりは、もともとは自分の身体がそういうコントロールから――僕が自分自身、すごくコントロール欲望が強いので――逃れたいと、ふだんからいろいろ工夫しているところなのに、ますます世の中でそういうのが強まっている感じだと耐え難いので、言うという感じですね。

○NK　なるほど。わかりました。私の感想をちょっと、千葉さんのコメントについての感想をちょっと言いますと、確かに、千葉さんの身体性がもともと〈脱コントロール〉に傾いているのも、そうなのでしょうけれども、もう一方で、やっぱり千葉さんは、哲学者としての社会的な役割みたいなものを担っておられる部分もあるのではないかと、ちょっと思います。

○千葉　ありがとう。ただ、それは結果的になんですよ。

そういう役割を担おうと思って担っているのは、後からそういう気持ちを持つようにはなったんですけれども。だけど、僕は、おのずとそうなっちゃうんですよ。だから、それは、意図的にやっているのとは違うんですよね。それは、一応、強調しておきたいところですね。

○NK　ありがとうございました。

○千葉　ありがとうございます。

○司会　なかなか非常に興味深い、山口先生や千葉先生が展開

されたいろんな話題に、ある意味重なってくるご質問だったなとうかがいました。

西洋近代的な普遍主義だと、そこから排除されているものがあった。とはいえ、だからと言って、単にそれではないもの、〝非‐西洋〟みたいな形で、〝ジャパン〟とか〝東洋〟を置いたところで、それは単に〝西洋〟と〝非‐西洋〟とを左右ひっくり返しただけにすぎないというか、構図としては何も変わっていなかったりする、ということですね。

言葉にしてしまって、固めてしまうと、それはまたひとつの固まった構造になってしまう。そして、そこに捉えきられていないものがあるのではないかと、気づいちゃう人がいる。気づいて、気になってしまう人がいる。そういう人のことを、何らか〝哲学者〟と呼ぶのかどうか――あるいは別に呼ばなくてもいいのかもしれないですけれども――、ソクラテスなどもギリシアのポリス社会のなかでそういう存在だったのでしょうけれども、そうした人のことを、ある種の皮肉を込めたポジティヴさで、〝嫌われ者〟という呼び方をするのか、どうか。このような話題、大変興味深くうかがいました。

山口先生、いまのご質問に対して、何か補足されますか。

○山口　関連して述べると、だから、ポジション空いているから、というような、そういう順序の話では全くないですね。そうだな。もっと複雑ですよね。日本哲学というものが、結果として逆のほうに行くとか、この場合〝非‐西洋〟のポジションに向かうというところはたしかにあるかもしれません。とはいえそれだけではなくて、もう少し内発的な運動があって、そこが端緒になっている。そういうのが、〈J哲学〉ではないかな、ということですね。

○千葉　ちょっと補足します。

二元の偶然的な邂逅は、ある種の危険性に賭けることだという点について、もう少し具体的に言うと、それは、〈自分が何かを失ってもかまわない〉と思うことです。たとえば、これから病気が悪くなるかもしれないときに、そのことを見越して、より無難で安全に、あまり体を動かさないでおこうというのは、失いたくないわけです。ただし、そのことによって、今後悪くなるかもしれないけど、ただ、今の現在を生きることが失われるわけなんですね。そこが引き換えになってるわけです。

昨今、すごく強くなっているのは、〝持っているもの〟と、その〝喪失〟という発想です。僕は、それは、資本主義の全面化だと思います。

かつての時代だったら、まず有形の財物を持っていることにとどまったわけなんだけれども、どんどん資本主義が高度化すると、より象徴的で抽象的なものまでも〝所有〟の観念に入ってきて、さらには自分のある種のマインドの状態とか、

そういうものまでも〝所有〟の観念に入ってくるわけなんです。

そうすると、所有しているそれが毀損された、一部傷つけられた、奪われた、取られたとなると、それを取り返せ、という話になってしまう。〈失われてもかまわない〉ということを考えるときに、重要な問題は、われわれが何かが失われたと感じることの歴史性なんです。

人類学的な発想を導入すると、たとえば、自分が損をしてでも、何か緩い連帯が展開するような共同体があって、そのなかで、平気でものをあげたり、無駄使いしたり、危険なことしたりしても、〝別にそれはそれで、よくない？〟みたいな感じで、何となく成り立つような世界もあるわけです。だけれども、そういうのは野蛮だからよくないと言って、全部、〝損しないように、損しないように〟とやってきたのが、近代社会なわけです。

だけど、そこにおいて失われたのは、〈失うこと〉によって得られる共同性なんじゃないかと、たぶん人類学者だったら言うと思います。そういう感性がすごく重要です。

考えてもらいたいのは、今日、そもそも〈失うこと〉を恐れることによって、失っているものがあるということです。そもそも、持つこと、失うことを、根本的に考え直す必要があるということです。

○山口　おっしゃるとおり、だから、たとえば健康も所有物というか、所有としての健康というかって感じになっていますよね。そうすると、健康を〝失う〟という言いかたをしてもいいと、非常に素朴にそう思われている。

○千葉　でも、こんな発想は哲学者ぐらいしか、わからない。

○山口　そう、健康に関してはね、健康を失って……とかっていう健康があたかも物であるような言い方まで出てくる。

○司会　千葉先生が〈失うこと〉という言葉を入れてくださったおかげで、先に出ていたコントロールや〈コントロール批判〉という言葉が、さらにひねりが入って、いろんな角度に、また風通しがよくなったなと、思いました。

かつて所有批判は、これは身体性などの問題として、メルロ＝ポンティやガブリエル・マルセルから引き継いで、鷲田清一先生が一九八〇年代頃から展開されていた事柄かと思いますが、〈J哲学〉の先人の一人として山口先生が名前を挙げていた鷲田先生のそうした仕事とかと、いま山口先生がやっていることとかとのあいだにある、つながり、あるいは断絶、そういうここ数十年の日本の哲学の歴史的な流れのことなども、ふと感じたりしまして、興味深くうかがいました。

NKさん、どうもご質問ありがとうございました。時間も少なくなってきました。もう一人、二人くらいは可能かなというぐらいですけれども、ご質問をぜひいただければと思い

ます。

それでは、TKさん、どうぞよろしくお願いします。

○TK　TKと申します。今日は、貴重なお話を聞かせていただいて、ありがとうございます。

先生方、お二方にお聞きしたいのですが、こういったデジタルな場での〈偶然性〉について、ご見解をうかがいたいです。

コントロールへの反発という話が今日もありましたが、私は、こういったデジタルな場での出会いが、本当に偶然なのかということに疑問を持っています。やはり、どこかエミュレートされているというか、裏でアルゴリズムが作動しているといった、そういったかたちでの偶然が、本当にリアルな出会いとしての偶然と同じように可能性の広がりをもっていくものなのかに疑問を持っているのです。ちょっとそのことについて、お話をうかがいたいです。

○山口　〝デジタルな場は偶然か偶然でないか〟と、本質を一般論的に定義するような言いかたをすると、袋小路におちいります。そもそも偶然・必然は、何かを自分がそう意味づけて、自分がどう生きるかが大事なタイプの物事だと、僕は思っているので。

〝こういう場の出会いが偶然だな〟と思い込み過ぎたら、別の大事なことが見落されます。たとえばこういう哲学の講演会という場もある種、哲学に興味のある人が選択的に集まってきてとか、こういう集まりになって、話も予定調和的になる傾向があるとか、そういう必然性の側が見落とされてくるところがありますよね。

結局、デジタルの場を偶然的なものにするには、その背後にある、われわれが意識してないんだけれども、われわれを誘導しているような、コントロールを仕向けてくるようなところに目を向けて、そういう要素を減らしていったりとか、そういう努力が大事なのかなと。

具体的に、どういう仕向け方が存在しているかっていうのは僕はわからないですが。一般的にどう対処するかが大事かなと思いながら、ご質問を聞きました。

○千葉　コミュニケーションしているときには何が起きるかわからない、という意味においては、別にデジタルにだって、偶然性はあると思います。そのことは、背後で、アルゴリズムで管理されているということとは、あまり関係はないと思います。この世界を統べる自然法則だって、アルゴリズムですから。そういう意味であまり変わらないです。

ただ、リアルのコミュニケーションは、身体が目の前にあって、外気にさらされ、この心臓が動いている、この身体がどうなるかわからない現場に立つという意味においては、デジタルとは違うものです。

今、ここでは、ＺＯＯＭでは、すぐに退出しようと思えば、すぐ出られちゃうわけですから。そのことと、差し向かいに一対一の人間がいるときでは、コミュニケーションの形が変わってきます。こうやって顔を見ていればそうはならないけれども、たとえば、ツイッター上でのリプライは、無限に突っ込み合いみたいなことが展開し続けるけれども、あんなこと、目の前に生身の身体がいてやる人はいないです。ひとつ何か言って、それに反論をひとつ言われて、それに対して、何か答える。その一往復で普通のコミュニケーションは止まります。もう一往復くらいはあるかもしれませんが、それ以上、さらに相手に突っ込む人はめったにいない。

つまり、身体の現実性は、そういうふうにストップさせるんですよ。そこがきわめて重要なんです。それは、目の前に身体があるからです。このことは、これからの時代に、ますます重要になってくると思います。

メタバースを公共空間にしていこうというのは、身体的な圧をなくして、圧なしの世界こそが民主的だという方向に向かおうとしているんだと思います。それは正しいように見えますが、それではストッパーが十分にかからないと思います。

人と対面で会って話すと、いろんなことが止まるんです。まさに抜き差しならぬ身体と身体の関係において、必然性の追求が止まる、偶然に流すということが起きる。

○ＴＫ　身体性による、有限性というか切断ということがやはりあるということですね。ありがとうございます。

○司会　ちょっと感想を言いますと、山口先生のご著書、あるいは今日のご講演も、仮に――山口先生は大陸哲学の教養も豊富だから、それだけじゃないですけれども――わりと無時間的でクリアな論理で書かれている、分析哲学的な手法で書かれていると仮定すると、その手法で六人の日本の哲学の論者の方々を扱っているんですけれども、その無時間的でクリアな論理を山口先生が突き詰めたために、そこから、では二〇一〇年代という特定の時間における日本社会とか日本の現実については、山口先生はどう論じるのですか、ということを、何か聞きたくなるんですよね。そこを表立って扱っていない本なのに、非常に聞きたくなるんですよね。

実際、今日、まさに千葉先生がそういう角度から、先ほどのデジタル・メディア論なども含めて、いろんなことを山口先生に投げかけたのではないかと感じまして、そこが非常におもしろく思われます。

かと言って、じゃあ、山口先生が社会について論じたら、さらに何か増し加えたことになるかと言うと、それは、また論が別のものになってしまう気もしてという、その何とも言えない微妙さといいますか、何かと何かが出会いそうな、出会わなさそうな、みたいなところが、むしろ刺激になって、

いろいろなみなさんのご質問やご発言をうながしているような、そういう気がするところです。

○山口　社会のことを書かないというか、そうだな、私は、本と向き合う人なんです。読む人というわけです。ここでも一回挙げましたが、被投性というか、自分が分析哲学やっていて、ある種、こうした論じ方を得たんです。

読むことを続けてきた結果として、テクストに向き合うという行為で、語っている人の言葉を生かす、そういうのができればという感じで書くようになったんです。そしてこうしたスタイルを自分で選びとっていて――できているかどうかわからないですけどね――、その集積が、こういう本になってくる。

まさしく何が言いたいかと言うと、いろいろ投げ込まれたところからしか書けないということ。ただし、縛られてばかりでもいかんので、自分の投げ込まれたところから、型を壊しながら、何か違うものをやっていく。読むことはその過程の一環です。なかなか社会とか、そういう感じにはつながらない感じなんだけど。とはいえ、社会について書かないとか言うとそれも縛りになるから、書かないとも言いませんが。という感じです。

○司会　そうですね。まだまだ、そのあたり、いろいろなポイントがあると思います。コントロールとは異なるもの、ただ〝所有し、失わないこと〟とは異なるものとして、そのつどの社会の制約に縛られないような思考のあり方を探りつつ、といいますか。

他方で、山口先生や千葉先生は、千葉先生の場合は小説も含まれますけれども、言葉を構築して、本当に言葉を選んで選んで、吟味して、組み立てて、ひとつのテクストを作り上げるという、職人的な面も強くお持ちの方々であられます。そうした職人的な面のことは、コントロールと呼ばないとしたら、何と呼べばよいだろうか、ということも、最初のお二人の対談の最後のほうで思ったりしました。しかし、これはあまりにも話が広がりすぎます論点ですが。

さて、本当にお時間が、長時間になってきました。みなさんお疲れだと思いますので、そろそろ締めくくろうと存じます。すでに十分、大量のことが語られたと思いますし、また時間も二〇分以上オーヴァーしておりまして、司会の不手際で恐縮ですけれども、たいへんヴォリュームのある一日になったかと思います。

それでは、最後に、両先生からひとことずつ、何かございましたらと思います。では、まず山口先生からひとことお願いします。

○山口　いま最後に言われた、僕が本を書くときコントロールしていないのかという話は、それは大事だし、また考えてき

ます。本を書くとはどういうことか、ですね。それは宿題にします。

○司会　次は、どんなものを書くか決まっているのですか、山口先生は。

○山口　一応、書いているんですけど。また、お楽しみということで。

○司会　楽しみにしております。ありがとうございます。

千葉先生、最後に何かありましたら、よろしくお願いいたします。

○千葉　今日はありがとうございました。

僕は三月に講談社現代新書で、山口さんの『日本哲学の最前線』と同じですけれども、講談社現代新書から、『現代思想入門』という、デリダ、ドゥルーズ、フーコーという順番で三人説明してから、さらに展開するというものを出しますので、ぜひ、皆さん、読んでください。

授業やゼミでも使える教材になるよう作りましたので、ぜひみなさん、ご活用いただければと思います。よろしくお願いします。

○司会　また、新しいご本が出るということですね。今日は、大学生、学部生の方とか、院生の方、さまざまな方もいらっしゃいますし、大学の先生の方もいらっしゃいますけれども、千葉先生のご本を活用いただける場面がみなさんさまざまにあろうかと思います。

両先生、改めて御礼申し上げます。そして、長時間にわたって、本日ご参加くださいましたみなさんも、本当にどうもありがとうございました。非常に有意義な会になったと思います。

拍手を、ＺＯＯＭの機能で、挙げていただいている方々がいらっしゃいます。

○山口　ありがとうございます。

○司会　それでは、これをもちまして、本日の第三回九鬼周造記念講演会を終了にいたそうと存じます。長時間、どうもありがとうございました。

○千葉　はい、ありがとうございました。

○山口　ありがとうございました。